
ダウンフォール

荒巻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダウンフォール

【コード】

N5419F

【作者名】

荒巻

【あらすじ】

違う歴史を歩んだ世界。東の果ての大陸の、凍てつくような大地の上で、兵士達の世界が始まる。

第一章・230 high(前書き)

英国陸軍 アレックス・ブライズ大尉

2010年10月、海外派遣プログラムにより国際連盟平和維持活動に参加。中華民国・満州国係争地である熱河省に派遣される。同年12月、同地で武力衝突が発生し、戦闘に参加する。

第一章：230 high

「結婚する時にはね、笑顔で、俺の仕事が誇らしいなんて言ってくれたもんなんですがね」

そう言つて、メイヒューの顔は焚き火のまぶしいオレンジ色の光に撫でられた。

小さな火の粉が妖精のように、弱弱しく舞う。

「それが今じゃあ、まるで軍隊を誘拐犯みたいに。送られてくる手紙には愚痴と催促しか書かれてないんですよ」

いつもより夜空が暗く感じ、刺すような冷たい空気はさらに冷え、着込んだ軍用コートはくたびれ、塹壕は狭苦しく感じた。

「愛されてる、ってことじゃないか。次の休暇は国に帰って思い切り抱きしめてやれよ。それで万事解決だ」

俺はコーヒーを一口飲むとそう言い放った。少しの笑みを浮かべ、だが一切の同情を持たず。

口からは暖かな息が、白さを身にまとつて空中に消えた。

「贅沢者の悩みだな。離縁した者の耳からすれば」

「でもね、ブライズ大尉」

メイヒューは顔色を変えなかった。もつとも、折からの寒さで変えるほどの顔色さえなかったか。

「このまま続けていけるのか不安で……。彼女に軍隊に対する理解がないんじゃないかって、そう思えて。子供も欲しがっているようだし、俺も30超えてますから。子供が出来たらそれこそ、彼女の軍隊に対する感情は、俺が軍人であることを許さないんじゃないかって。母親が父親の仕事を尊敬しない家庭が、子供を満足に育てられるんですかね」

そうやって、俺に視線を合わせなかった。俺はコーヒーをもう一口飲むと、メイヒューに差し出した。

「飲めよ」

「すみません、とメイヒューが受け取り、口をつける。メイヒューがコーヒーを一口飲んだことを確認すると、

俺は一斗缶の中で燃える焚き火に燃料を足し、言った。

「新婚なんてそんなもんさ。すれ違ってなんぼだ。話せば分かってくれるさ。初めて夫が海外任務に就いたから、不安もあるんだろう。お互い初めてのことだからな。すぐ乗り越えられる。」

それに、今更軍隊を辞める気は無いんだろう？なら答えは一つだ」

「はい。でも妻を愛してもいます。あまり悲しませたくないんです」

俺は軽く笑った。自分より4歳しか違わない屈強な体つきの下士官が、今はただの高校生に見える。

ひどく決断力に欠け、同じところを堂々巡りしているようだった。

「今は耐えるか、信じることだ。お前にそんだけ愛されてるなら奥

さんは幸せ者さ。自信を持ってよ」

そう言うと、メイヒューは困ったように笑い、乾いた笑い以外は口に出さなくなった。

短くまとめられたブロンドの髪が、ひどくくたびれて見える。

途端に、メイヒューの顔は無表情になった。

これはちよつとまずい。どうやら本当に真剣な問題らしい。

俺は、正直困る。

メイヒューは生真面目で、不器用で、何事も考え抜く性格で、色恋沙汰にまつすぎすぎ、何より妻を愛していて、

そして馬鹿なのだ。

俺はと言うと、おそらくメイヒューと同じくらい不器用で気の利いたことが言えなかった。

下士官が常にこの調子だとひどく都合が悪い。

かける言葉が思いつかなくなった俺は、隣の壕でライフルの世話をしていたアトキンソンの頭を叩いた。

いてっ、と振り返ったアトキンソンの抗議のまなざしを無視して、

俺は「お前も何か言え」と小声で促す。

壕から頭を覗かせ軽く目線を流してメイヒューの様子を見たアトキンソンは、わざとらしい咳払いをして、

分解途中のライフルを地面に敷いた布の上に置き、自分の壕からこちらに身を乗り出して言った。

「あー、あれすよ、メイヒュー軍曹。女なんてのは結構たくましい生き物で、

夫がいなくても元気にやってますって、多分。近所の旦那とかと」

それはフォローになつてないだろうと肘でアトキンソンを小突くと、イタズラっぽく笑って欠けた前歯見せる。

「まあ、なんつーか、考えすぎなんすよ、軍曹は。手紙で愚痴書かれたくらいでさあ。」

向こうはそうやって軍曹を困らせたいただけなんですって、絶対」

ここまで来て、アトキンソンも俺と大して変わらないほど不器用だと気がついた。

「だから、ほら、気楽に行きましょうや。時期に俺らの海外派遣プログラムも終わるし。そしたら国に帰れるじゃないすか。」

そしたら奥さんと会って、軍隊とこれからのことについて話しましよつや。悩むのはそれからでも遅くないすよ。」

今ここで悩んでたらさあ、国に帰って奥さん抱く前に身が持たないすよ?」

そう言ってアトキンソンは、悩みなどとは全く無縁そつな笑みを浮かべる。

メイヒューはアトキンソンへ向かって視線を少し上げると、少しだけ表情を崩した。

「ああ、そつだな。すみません、大尉、少し辛気臭い話をしすぎました」

そう言って、メイヒューはコーヒーの入ったマグカップを軽くゆすった。

「気にするな。悩みごとは誰かに聞いてもらうもんだ」

俺は幾分ホツとしながら笑みを浮かべる。寒さで固まった顔の皮膚が引きつる。

「軍曹は美人な嫁さんがいるだけ幸せもんすよ。俺とブライズ大尉
なんか女と別れちまつたが最後。
誰も近寄ってこないんすから。ねえ？」

そう言ってくるアトキンソンを俺が乾いた笑いで一蹴すると、メイ
ヒューがコーヒーを俺に返そうとマグカップを持った手を差し出し
てきた。

俺はありがたく受け取ると少し口に運ぶ。先ほどよりも幾分ぬるく
なっていた。

「ブライズ大尉はいつ故郷に戻られるのですか」

メイヒューが俺に問いかける。先ほどまで俺の横に身を乗り出して
いたアトキンソンは自分の壕に引っ込み、
ライフルを分解しているのか組み立てているのか、何やら力チャカ
チャと金属のかち合う音が聞こえてくる。

「あと半年か一年か……。少なくとも三ヶ月はここにいなきゃな
らないだろうな。士官クラスはとつかえひつかえできない状況だ。
一旦政治的状況が落ち着いてからじゃないと、休暇は出ないだろう。
政治的な進展やその見通しははまだ立たず、てな感じらしい。
聞いた話ではな」

そう言っただけ俺はコーヒーの入ったステンレス製のマグカップを、一
斗缶から顔を出す焚き火にかかげた。

分厚い軍用手袋が俺の手を熱気から守ってくれる。これで少しはコ
ーヒーが温まればうれしかった。

凍えるような寒さの中、体は内側から温める必要があった。

「赤峰市で爆弾テロがあったらしいですね。敵の特殊部隊でしょう

か

「さあな。俺達前線の歩兵には確認する術も無いし情報も入ってこない。ラジオでも何もやってないしな。」

戦争を再開したがってるのがどいつらなのかってこともある。この問題は複雑だ。」

俺達はここで穴掘って引っ込んでるしかやることがない」

「歯がゆいもんですね」

「されど大きな一歩さ」

俺はそう言ってかかげたマグカップを口に運んだ。

「今まで国際連盟は紛争問題に関して経済的な関与しかできなかった。大国間の問題ならそれで十分だが、

経済よりも軍事に依存する国家には効果的ではない。そして世界で起きている多くの紛争の当事者はそういった連中だ。

だから国際連盟は国際紛争に関しては無能だと言われてきたし、紛争問題は野放しだった。

だが、それも終わりだ。今は俺達がいる」

そこまで俺が言うと隣の壕からライフルを抱えたアトキンソンが飛び出し、俺達の壕に滑り込んで来た。

俺はコーヒーを砂煙から守ろうと、とっさに身の陰に隠す。

「つまり、世界の平和を守る正義の味方、ってわけすよね」

アトキンソンは悪びれる素振りも無く、イタズラっぽく笑った。

「直接介入はできない。しかし、係争地に割って入って武装中立地帯を形成することは可能だ。今のように。国連理事会での承認が必要だがな」

コーヒーの無事を確かめながら話す俺の横で、アトキンソンはライフルのチェンバーが空であることを確認して、大げさにライフルを構えながら言った。

「でも撃たれたら撃ち返せるんでしょ」

「多分、な」

俺の玉虫色の答えに、アトキンソンは振り向いて怪訝な顔をする。

「んな、俺達軍人すよね？」

「多分、な」

俺の二度目の答えに目が点となるアトキンソンに、メイヒューは多少呆れながら言った。

「俺達は今や英国軍人である前に国際監視団員なんだ。俺達の指揮権には陸軍省だけじゃなく外務省も一枚噛んでる。

つまり俺達は一種の外交官なんだよ。もし攻撃を受けても、本部の許可があるまで反撃できないし、ましてや陣地から出たの追撃なんてもつての他だ。お前、規約確認せずに志願したんじゃないだろうな？」

「そりゃあ、大尉と軍曹が行くって言うから、俺も志願しようと思っただけ。ていうか、本部は許可くれるんすか？」

「陸軍と外務省の折り合いがつけばな」

アトキンソンは呆気に取られて、ライフルを構えた姿勢のまま固ま
ってしまった。

「それって、すげえ変な話じゃないすか・・・？」

「国際政治というのはそういうものなんだ」

そう言うと、メイヒューは苦笑しく笑った。様子から見ると、メイ
ヒュー自身も本音ではアトキンソンと同じ気持ちなのだろう。

兵士には常にいかなるときも自衛の権利が与えられている。それは
一般市民にとつての基本的人權と同じものだった。

しかし、掲げる旗が一本付け足されただけで、それは著しく制限さ
れてしまう。

俺達の塹壕陣地には高々と国際連盟の地球をかたどった旗が掲げら
れていたのだ。

俺はコーヒを一気に飲み干すと、二人の会話に割って入った。部
下の疑問やわだかまりに終止符を打てるのは、

圧倒的な権限と強制性を持つ上官の言葉に他ならなかった。

「国際連盟の実質的な紛争介入はこれが初めてなんだ。何かと不足
な部分があるのは事実だ。

だが、それでも俺達がここにいてるってことは、世界の不毛な武力紛
争の大安売りに終止符を打ち、

平和と言うものが一部の先進西側諸国の市民達の専売特許ではなく、
世界中の人々が等しく平和な世界に生きる権利がある、

一般市民を犠牲にする無意味な戦争の拡大を座して見届ける気は無
い、

っていう国際連盟の強い決意と理想の実践者でもあるってことなんだ。このことは誇りにしていいことさ。

今まで誰も怖くてできなかったことなんだからな。

世界の平和を守り、理想を実現する者達が、血まみれじゃ困る。

それに……………」

俺の「それに」の後を聞こうと、メイヒューもアトキンソンも耳を立てていたようだった。

「…………それに、戦争にはならんさ。俺達は一発の弾丸を撃つことも無く、一人も殺すことなく、

国に帰るんだ。きっと、な」

第一章：230 high (2)

見渡す限り壮大だった。

空は透き通り、大地は妙にうねりながら地平線の果てを隠している。

ここ、熱河省はかつて日本経済圏の一角である満州国の領地であり、現在は中華民国との係争を経て、南北を太い武装中立線に貫かれている。地図上の空白地帯だ。

寒帯のツンドラ気候に属し温暖な季節は極端に短い。

現在は11月だが、気温は恐るべきほど、殺人的に低く、時には氷点下30度ほどにまでなる。

一般生活に重大な支障を来たすもので、屋外に至っては瞬きすら難しいのだ。

拳句、土地柄山や森といった障害物がすくなく見渡す限りの丘陵地帯であるため風をさえぎるものがない。

体感温度はさらに低く、防寒具は必需品となる。

地面は茶色だ。表面に緑の植物が生えているということは少ない。厳しい冬が、たとえ小花といえども生存を許さないのだ。

冬を越え、春を迎え、気温がわずかに上昇し、日光の量がお情け程度に増えると、冬の間には押しさえつけられていた生命が

ここぞとばかり躍動し、あたり一面の地面という地面がタンポポなどの花々に埋め尽くされ、幻想的な花畑が現出する。

彼らはわずかな繁栄期を狂い咲いた後、冬の到来とともに全て枯れ果てて、その残骸が地面に積もり、

自らの生命の残り香を次世代に残す。

だから、満州の荒野は、目には見えないが生命の情熱に埋め尽くされている。

土地は肥え、地面の表層は全て腐葉土であり、農作物にとってはま

さに天国だった。

日本が派遣した満州開拓団のほとんどが農民だったというのも納得できる。

以上が、俺が知りうる限りの情報だ。

俺達、英国軍熱河省派遣隊E中隊80名は省都赤峰市の北東200キロ地点に布陣していた。

通称230高地。

延々と続く丘陵地帯を眺められる、ここらでもっとも高い丘だ。

俺達は熱河省の武装中立地帯に展開する部隊のうちで、満州国側に相対するもっとも外郭の部隊だった。

かつてこの地で血で血を洗う闘争を繰り広げた中華民国と満州国を切り離す最前線の実働部隊ってわけになる。

230高地の頂上付近の東側に四つの塹壕陣地を築き、反対の西側には所属する大隊の本部がある。

正面のなだらかな東側斜面を下ると、7キロほど先に幅50メートル程度の川が横切っている。

そこが、武装中立地帯と満州国の主権が及ぶ領域との境目だった。

もし満州国の軍隊が川を渡れば、規定上は、警告の上従わない場合は攻撃を加える権利が俺達に与えられている。

川は戦争と非戦争のリトマス試験紙であり、俺達はそれと合わせてこの川のことを「ブルーライン」と呼んでいた。

「ブルーライン」の対岸は、丘陵地帯の真ん中にポカリと開けた小さな平地となっていた。

もとは国营農場が酪農施設だったのか、いくつかの施設群が点在し、柵が張り巡らされて複数の区画に分けられている。

平地の向こう側には230高地よりも高い丘が連なり、地平線を隠していた。

「これでは”陣地”とは呼べませんな」

高地に突っ立って丘陵を眺める俺に、工兵隊長のスミス曹長が話しかけてきた。

俺と同様ごつい軍用防寒コートに身を包み、分厚い手袋をはめた両手をしきりに擦り合わせている。

「人手不足、資材不足、認識不足と、見事に三拍子揃ったもんだ。いくら資材をよこせとたきつけてもセメント一つよこさんときた」
当年40歳。中隊工兵の最古参であるこの老兵は俺と同じく英国労働者階級の出身で、気品というものに無頓着だった。

顔面の髭は放置されている。三度のメシより酒とタバコが好きというどうしようもない性格だと思うが、俺とはちがって嫁さんとは上手くいつてるらしい。

顔にはありありと不満の色が見える。

5日前に国際監視団本部 自称「国際的」な意思決定機関の元に置かれている とやらから230高地に、

「より実戦的な」防御陣地を作るよう指示を受けて以来、彼の機嫌が優れたことなどなかった。

俺に話しかけてきたのも愚痴を言うためか、それとも

「敵の戦車が来たら半日と持たずに陥落ですな」

さっさと「大尉」とやらの権限で何とかしろと催促しにきたのか・
。

「もう一度大隊長を通して本部の兵站部に要請してみるよ。もつとも、望みは薄い。今じゃどこも物不足なんだ。

重火器の類ならいくつかは融通してくれるだろうと大隊本部の兵站参謀は言っていた」

「兵どもの問題ですぜ、大尉殿」

わざとらしく「殿」の部分強調して、スミスは後ろを振り返り、点在する四つの陣地に目をやった。

丘の頂上付近東側に作られた防御陣地は貧相というほか無かった。

スコップで地面掘り、土を囊に詰めて積み上げた、まさに「野戦陣地」といった様相だった。

五つほどの大穴といくつもの小さい穴が集まって一つの陣地となり、細長い塹壕が連絡路としてそれぞれ四つの陣地を繋ぎ、その周辺をたつた一重の有刺鉄線が引かれ、「防御陣地」と呼称していた。

必要なセメントと木材が手に入らず、みすばらしいシートを屋根代わりに掩蔽壕を作る。

そこにいくつかの対戦車ミサイルを詰め込み、機関銃を数丁備え付けた。

重火器の発達した現代において、このような防御陣地がいかほどの強度を発揮できるか甚だ疑問というほかない。

工兵活動が始まって以来ずっと、スミス曹長は中隊の兵站部に資材不足の文句を言い続けてきた。

しかし、前向きな答えが返ってきたことは一度も無い。

「土で出来た陣地は風を凌ぐだけのもんだ。こんなクソ寒い状況でモグラの穴に籠る兵どもなんざどんな冗談ですかい。」

凍死しないために夜中でも平気で焚き火をする。シートが燃えるから掩蔽壕のそとで燃やすしかない。

壁が無いから敵には丸見えだ。こんなもん自殺行為ですぜ」

兵站部が当てにならないと知って近頃は抗議の矛先を俺に変えてきたらしい。

しかし、俺自身、大隊本部にこのことについて再三問い合わせてきたのだ。

それでも、明確な答えが返ってきたことはない。

「上海に荷揚げされた物資がまだ届いていないのかもしれない」

苦し紛れの憶測が口から零れた。

しかし、労働者階級の出身と言ってもスミス曹長は政治の欺瞞性というものに対して決して無知ではなかった。

「大方、本国のクソ議員どもにかき回されてんでしょう。アメリカ

の政治ショーに英国が金を出す義理はないとか云々御託を並べ立て、
臨時予算の計上を邪魔してるに違いない。だから必要な物資調達計画に遅れがでてるんだ。

本国から運ぶには手間がかかるから現地の中国で調達しようとした方がいいが、金融危機の通貨下落と中国側の商売根性のせいではいいが、調達コストが上がっちゃったワケだ。ほとんどの金はインフラ整備とやらのおべっか使いにやられてんでしよう」
スミス曹長の口から早口で出てきたそれらの言葉に、俺は言い返すことも出来ず、小さくため息をつくしかなかった。

おそらくは、まあ、そういうことだろう。

英国本国からスエズを越え、

インド洋を東進し、

マラッカを抜け、

台湾海峡を潜り抜ける物資輸送は時間も手間も金も掛かりすぎる。

そのための本国の陸軍兵站部門のトップ達は、火器類を除いた食糧、建築資材のほとんどを中国での現地調達とした。

しかし、ここでも政治家の横槍が入った。

曰く、「両国の友好に貢献せよ」

つまり兵站の大元は中華民国政府に「委託」せよ、というわけだ。

これで中華民国側は、もつと言えばその政府内部で縄張りごっこをしている財閥連中は、

物資提供を名目に、英国軍に対して大々的に商売ができるわけだ。

政府要人か、国民軍の兵站将校か豪商か誰かは知らないが、あるいは全員が、臨時収入を手中にする。

なにせ先行き不透明な長期派遣になる可能性が非常に強いのだ。

約8000人の数か月分の食料と建築資材は小遣い稼ぎにちょうどいい。

調達コストは中国側がふっかける値段次第で値動きするわけだ。

なにかしら適当な理由をつけて高額を吹っかけることさえできる。さらにまずいことに、これら物資調達用の予算は、派遣軍単独ではなく、

内戦で荒れ果てた中国内部の復興支援計画の予算に組み込まれているワケだ。

政治家連中は金融危機でスタボロの中、活路を製造業に見出そうとしており、

自国製品の売り込み先に13億の人民を抱える中国を捉えている。

中華民国政府は数十年に及ぶ中国共産党瑞金政府との内戦、

そして統一後の満州国との5年間に及ぶ国境紛争によって経済発展は立ち遅れ、強力な国内企業閥が育っておらず、

そこに付け入ろうとしたものだ。

中華民国政府もそれを逆手にとり、「英国との自由貿易協定（無制限貿易）」の為に、英国に国内インフラ支援を要求した。

ここに両者利害が合致した。中国は国内のインフラ整備が進み国家基盤は整えられ、英国は巨大な市場を手に入れる。

そのため対中復興支援は驚くべき早さで議会を通過したが、中国側は、物資調達によって得る利益よりも、

インフラ整備の為の土木事業の方がはるかに利益効率がいいことに気がついた。

その為、復興支援予算の内の、軍隊向け物資調達予算がインフラ整備予算に侵食され始め、圧迫された。

物資調達予算がインフラ整備に右から左へ流され始めたのだ。

物資調達に携わっていた中国企業やブローカー達は先行きを懸念して値段を吊り上げ始める始末だった。

そのために、物資調達は大きな支障を来たしている。

その煽りを食らうのが、最前線にいる俺達だ。

「誰も彼も金のことしか頭にねえんだ。俺たちや都合よく利用されてるだけ。馬鹿げてますぜ。」

・・・あの丘の向こう側にいる連中は、こっちの都合なんざ眼中にねえ、ってのに」
そう言つて、スミス曹長は「ブルーライン」の奥に連なる高い丘陵群を眺めた。

あの丘の向こう側には、おそらく俺達と同じような任務を負った満州国の兵士達がいるはずだった。
かつて、この地を巡って中華民国と5年間に渡る死闘を繰り広げた連中。

この満州の荒野を、半世紀をかけて開拓した移民の末裔達。
彼らが、今何を考えて、この丘陵地帯を眺めているのか、俺には分からなかった。

「必ず取り返しに来ますよ。俺ならそうするね。

自分達が命を賭けて争った大地の上で、

どこの国からやってきたヨソ者が、

呑気に穴掘って小遣い稼ぎに利用してるなんて、

俺ならそれを黙って眺めてるなんてできねえ。必ず取り戻す」

しかめっ面のまま丘の向こう側を睨みつけると、スミス曹長は吐き捨てるようにそう言つて、

工兵作業を監督する為、陣地に戻っていった。

そうなのだろうか。

あの丘の向こう側にいる人間達は、再び戦争の準備をしているのだろうか。

俺がその答えを知るのは、もう少し後になってからだった。

第一章：230 high (3)

その日の夜、俺は大隊本部に呼び出された。

230高地の頂上付近西側斜面に気づかれた大隊本部は分厚いコンクリートに

覆われ中には十分な暖房器具が設置されている。

我が中隊陣地が貧窮を極めていることとは対照的だった。

これなら極寒の夜にも寒さに震えることも凍死に怯えることもなく随分快適な眠りにつけるはずだろう。これは高級将校の特権である。英国陸軍熱河省派遣隊E中隊の上位部隊である派遣軍オリエンタル連隊第3大隊は

ベークフォード少佐の指揮下にある。ジェフ・ベークフォード少佐はボキャブラリーに

富んだ人物で、髪の毛はブロンドで勘違い野郎に多いまるで米海兵隊のような短髪でなく

ほどほどに短い。健康的な体つきであり家庭的な男で、話し言葉はケンブリッジ訛りである。

典型的な上流階級だった。労働者階級出身の俺とは”タイプ”が違う。

彼には十分な暖を取る権利があった。

俺は暖かな空気で満ちた大隊本部に潜り込み、ベークフォード少佐と対面した。

靴の踵をカツンと合わせ、敬礼する。ベークフォード少佐は静かに応じた。

整った顔をしている。貴族然とした顔だ。俺より2歳年上だった。

「アレックス・ブライズ大尉です」

と、すでに知られている名前を言った。少佐は「座れ」と応じる。パイプ椅子が用意されていた。ほのかに紅茶の匂いが漂っている。

「少しここで待て」

そう言つてベークフォード少佐は部下に紅茶を持ってこさせた。

それから約5分ほど待たされ、その間に第3大隊に所属する5個中隊の中隊長が

続々と大隊本部に集まつてきた。

既に時計の針はよる11時を指している。こんな時間に大隊の高級将校が集まつて

会議だろうか。俺は嫌な予感がした。

俺達を取り巻く大きな状況に、何か大きな異変があつたのだからと直感した。

少なくとも、一向に改善されない劣悪な兵站状況に関する前向きな話し合いではないだろうと思つていた。

そうこうするうちにベークフォード少佐が口を開いた。

「今から約30分前に」

そう言つて5人の中隊長の顔を見渡す。

「満州国の首都新京でクーデター騒ぎがあつた。正統な指揮系統から逸脱した複数の部隊が

官庁街の一部、あるいは全域、情報がはっきりしていないが、少なくとも一部を占領した

とのことだ。クーデター軍の規模と関係者等詳細は現在不明である」

鮮明で聞き取りやすい言葉だった。おそらく誰も聞き間違いも聞き漏らしもしていない筈だ。

だが、俺を含めて5人の中隊長は誰も顔色を変えもしなければ驚きもしなかった。

多少は緊張が走ったかもしれないが。

実のところ、アジアとは2万キロ離れた世界に暮らしていた我々英国人にとって、

アジアでの政治状況などは一切関心外のところであり、辺境の民族事情とさえ考えていた。

文明の囲いの外の出来事であり、民主主義的安定の期待などあるはずもなく、常に不安定な

政治状況だろうというのが世間一般的な認識であり、現地に送り込まれた派遣軍兵士達でさえ

さほど変わりの無い印象を抱いている。

イギリスのロンドンが戦場に早変わりしたのは決定的に違う。

「アフリカが飢餓である」という言葉を聞いた時となんら変わらない。

つまり、ああ、そんなだろうと、その程度の驚きと関心である。

「これは不測の事態だ」

とベークフォード少佐は言うが、そのような実感は俺にはない。

おそらく他の5人の中隊長にも。

「各中隊は部下の混乱のないよう、かつさらなる不測の事態に対応できるよう

厳戒に体勢を整えるように。おつて連隊、あるいは派遣軍司令部から命令があるだろう」

つまることろ「気合を入れる。だれるな」そう訓戒して今夜の会合

は終わった。

それだけだった。

俺は寒さに凍えながら中隊陣地に帰った。将校の哀れでもある。いかに厳しい状況でも走ることは許されない。将校の威厳を保つことが将校の任務でもある。

中隊陣地に戻るとメイヒューとアトキンソンに会い、下士官を全員集合させた上で満州国で起きたクーデター騒ぎを話した。思ったとおり部下達の反応は俺と変わりなかった。

「それで、どうなるんですか、俺達は」

メイヒューがみんなの当面の関心事を言った。

「今のところ不明だ。情報が少なすぎる。おそらく夜が明ければ更なる情報が入ってくるだろう。詳しいことはそれからだ」

俺は用心深く、最低限の見解を話した。ベークフォード少佐の「部下の混乱のないよう」というわけだ。

だが実際の胸のうちは、もしかしたら満州国の政治体制が崩壊し、結果的に中満間の紛争の現実性が低下するかもしれないという小さな予想はあった。

そしてもしかしたらなら、俺達の派遣プログラムは予想よりも早く終わるかもしれない。

一切の血を流すこともなく。

そのような甘い展望があった。

それが大いなる過ちだったと分かるのは、もう少し時間がかかる。

第一章：230 high (4)

次の日の朝、ようやく追加の兵站物資が大隊本部に届き、我がE中隊にその幾分かが配当された。

セメント800キロと木材がいくつかである。理想とされる量には到底達していない。

まだ当分はこの貧相な野戦陣地に寝泊りするしかないのだろう。

国際監視団本部から野戦陣地を構築すると命令があってもう一週間が過ぎた。

この野ざらしの野戦陣地で送る生活は今まで受けたどの訓練よりも厳しい気がする。

何よりも気温が常気を逸して低い。早く兵舎に戻りたかった。

工兵隊長のスミス曹長がさきほど届いた物資にさっそく飛びつき陣地を補強している。

アトキンソンは狙撃銃のスコープから壮大な丘陵地帯を覗き込んでいた。

メイヒューは満州国のクーデター騒ぎが気になるのか、昨日からずっとラジオに囁り付いている。

他の兵士達は交代制で体を動かさせていた。放っておくと兵士というのはだれきってしまうのだ。

「満州国のクーデター、なかなか怪しい情勢ですね。もしかしたら俺達にも火の粉がかかってくるかもしれない」

メイヒューは真剣な面持ちでそう言っていた。もしかしたら第六感というものが彼にはあったのかも知れない。

実際にそれから数日間に俺が聞き知ったクーデターの展開に関する情報は、どれも当初の楽観的な予想を裏切り、

兵士達の中たるみを拭い去ってしまうような内容だった。

クーデター軍の規模は首都師団の1個連隊。首謀者は予備役中将だと言っ。

彼らは首都の中核、官庁街を深夜制圧し複数名の国務大臣と議事堂、総理大臣官邸、警察庁、外務・内務省、陸軍省及び総司令部を支配下に置いたが、

肝心の国務総理大臣を取り逃がしたという。

クーデターの夜から一夜明けて、クーデター軍は軍事政権の樹立を宣言したが、昼過ぎには国軍の反撃を受け、官庁街の一部と外務省庁舎を奪還されてしまった。

夜になるとクーデター軍は示し合わせていたのか、地方にも反政府を掲げる部隊が蜂起したと報道があった。

クーデター軍の規模は総勢5万とも8万とも言われ、満州国政府は既に軍隊に対する統制能力を失ったというのが意見の大勢だった。

ただでさえ暇をもてあましていたE中隊の兵士達はラジオから流れてくる話題で持ちきりになり、誰もが満州国の内戦を予想しあっていた。

だが、クーデター発生からわずか23時間後、外務省を奪還した満州国国務総理大臣は正式な外交ルートを通じ、

日本政府に対して日満善隣友好条約に則り治安介入を要請したのだ。それからの数週間は、ラジオに囁り付くのに値する刺激を提供してくれた。

介入要請から24時間以内に日本陸軍の空挺師団が空路新京郊外に展開し、橋頭堡を築いた。空挺師団はその日のうちに官庁街のクーデター軍に攻撃を加え、

国会議事堂と内務省庁舎を奪還した。

介入要請から2日後、増強の空挺部隊が大量の物資と共に新京市街地の高速道路に強行着陸し、増強された空挺部隊は満州国軍と共同して官庁街のビル一つ一つを征圧していった。

3日目には日本の横須賀、佐世保、舞鶴から陸戦部隊を満載した輸送艦隊が遼東半島の大連を目指して出航したという。

この頃には世界中のマスコミが映像的スリルを求めて満州国への入国ルートを探し求めている。

日本政府のスポークスマンによると、臨時に編成された満州派遣軍は一次部隊だけで6万に上るといふ。いまだ政府の統制化にある満州国軍と合わせれば総兵力12万になる。

4日目には空挺部隊と満州国軍が官庁街の大半を奪還した。日本本土から出撃した爆撃機編隊か地方の蜂起部隊が占領している拠点を爆撃し、その光景をCNNとBBC、ロシアの複数のテレビ局が世界に配信した。大連に上陸した陸戦部隊は陸路新京を目指して北上している。

5日目、ついに官庁街は奪還され、首謀者の予備役中將は砲弾の破片を食らって死亡した。その他のクーデター軍首脳陣は逮捕され、いまだ地方で蜂起するクーデター軍に対して日本軍は爆撃作戦を激化させた。この日だけで6回の爆撃作戦が敢行された。

6日目と7日目には残る地方のクーデター軍も討伐され、満州国国務総理大臣は「反乱軍は完全に鎮圧された」と正式に発表した。

彼の証言によれば一連のクーデターで内務大臣、陸軍大臣、警察庁長官、陸軍高級将校8名と将官2名が死亡したという。

刺激的な陸上戦を消費しつくした世界中のメディアは、騒乱が一段落し終わると政治的なワイドショーに焦点を変更した。つまり拿捕されたクーデター軍首脳陣の裁判と、背後関係の調査である。彼らはすでにオフレコながら重要な情報を手し、これから始まる「落ち武者狩り」が自分達の資本主義的欲求 視聴率や購買部数、あるいは物質的に明らかに不釣り合いな写真の販売単価 に十分答え

てくれるだろうと推察していた。大量のマスコミが依然、首都新京のホテルからチェックアウトしようとしなない。

そして満州国政府のスポークスマンは、その期待に十分以上に答えてくれたのだ。

拿捕されたクーデター軍首脳らは徹底的な拷問にかけられその背後関係を洗いざらい吐かされた。内務省の情報局員らが関係施設を隅々まで、シミの一つ見逃さないほど調査し、クーデター軍の内情を全て把握しようと満州国政府、そしておそらくその後ろにいる日本政府は腐心していた。

そして、その時がきた。

クーデター終結から2週間後、拿捕されたクーデター軍首脳らは弾劾裁判の席上において決定的な証言を行った。

曰く、「中華民国（国民党）政府と内通し、現体制打倒の計画を共有した」とのことだった。

彼らの証言によると、計画の全貌はこのようであるらしい。

まず、クーデターの中心的人物であった予備役中将 庚玉勲が抱き込んだ首都師団の将校をつかい、部隊を出動させ官庁街を制圧。それと同時にクーデター軍首脳陣の一員であった2名の大佐が供回り十数名と共にそれぞれ陸軍総司令部と陸軍省の指揮・軍令中枢をおさえ各部隊との命令伝達系統を遮断し国軍の動きを封じる。

クーデター軍は官庁街を中心に幅6キロの封鎖線を張り幹線道路を閉鎖、官庁街を陸の孤島にした上で総理官邸・陸相官邸・議員宿舎などを部屋を一つ一つ洗っていき、国務総理大臣・陸軍大臣・参議府議長らを拘束する。陸軍大臣の拘束により陸軍の官僚機構的に可能な限りの行動を阻止し、国務総理には銃を突きつけ「辞意」を表明させ内閣は総辞職、参議府議長にもまた銃を突きつけ緊急議会を

召集し、完全武装のクーデター軍兵士の監視下において新たな首班指名を行わせる、その場合にはあらかじめ参議達に紙を回し自分達と志を同じくする（つまり共謀者の）参議が首班に指名され新たな内閣、新たな政府が誕生する。

無論、国軍の一部が反抗し、日本軍が介入する可能性が高いだろう。だが、その時は、1週間。1週間持ちこたえれば、新政府の要請により中華民国軍が救援に駆けつける、というのだ

だが実際には、国務総理大臣はすんでのところで脱出に成功した。直前に情報局がクーデター計画を嗅ぎつけたのだ。計画は初期段階で破綻した。

国務総理が辞職しないならば、内閣も政府も健在である。国軍は国務総理の直接命令という形でクーデター軍を攻撃しはじめ、日本軍の早期介入を招いた。

そして、計画はわずか1週間で完全に失敗した。

弾劾法廷に新たに6名の参議達が連れ出され、同様に徹底的な拷問を受け、全てを話した。

証言されたクーデター計画には一寸の間違ひも無いこと。国軍内部にかなりの数の同調者がいたこと。確かに中華民国国民党と内通していたことを。

満州国と日本政府のスポークスマンは凄まじい勢いで中華民国をののしりはじめた。日本は国連安保理を召集し中華民国への制裁と、あるいは国際的な場における謝罪、関係者の処分を要求した。

それに対して、中華民国国民党は関与を完全に否定し、逆にクーデター終結にも関わらず満州国内に日本軍が駐留していることを非難する行動にでた。

しかし、在満中華民国大使らがクーデター失敗直後に本国へ引き上げたこと。大使館とクーデター首脳との橋渡し役を努めていた漢人

系実業家が当局に逮捕・拷問されその内実を自白したことなどから、中華民国国民党の関与は確実なものと判明した。

それからの後、日本・満州国と中華民国間の対立は際立って悪化した。

中華民国軍は熱河省の中華民国統治下の「治安維持兵力」を増強させた。彼らの言い分では、満州国に日本軍の大兵力が撤兵せずに駐屯していることが、北東アジアの安定に悪影響であるとのことだった。逆に日本政府は、今回のクーデターが中華民国からの間接的な武力攻撃であると声高に主張し、熱河省の国連監視団に参加している諸国に中華民国への制裁を促した。

国連安保理は中国への非難決議を発表したものの、日本政府へは可及的速やかに満州国内から撤退するように要求した。熱河省の領土紛争に飛び火することを懸念したらしい。この点は俺達の関心とみごとに合致していた。まず兵を引いて感情的なもつれを回避しこの地域に政治的安定を取り戻した上で、国際舞台において事件の追及を行えばいい。その時は、国際連盟は十分に喜んで協力する。日本は大国としての自制心を持って欲しい。と、そうなだめた。

だが、これは日本政府の神経を逆なでするものだった。日本政府スポークスマンは、中華民国による熱河省増派を黙認する一方で、クーデター直後の混乱する満州国から、日本軍が撤退せよというのは、著しく公平性に欠けると国際連盟を非難した。たしかに、中華民国の不透明な熱河省（係争地帯）への兵力増強を国連事実上黙認していた。

英国をはじめ、国際金融危機に喘ぐ西側諸国の多くが、13億人と
いう中国市場を狙っていることは周知の事実だ。自然、彼らは親中
的になる。

このねじれは、日本政府と満州国の疑心暗鬼を修復不可能なものに

したらしい。

あるいは、彼らはこの機会を待っていたのかもしれない。
そして230高地にいる俺達はあの12月を迎えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5419f/>

ダウンロード

2010年10月9日23時01分発行